

◆授業に関するアンケート◆

「2019 年度春学期 授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長 若本夏美

はじめに

授業に関するアンケートは 2019 年度、大きな変革の時を迎えました。ICT (Information and Communication Technology) の進歩と普及は留まる所を知らず、大学もまた例外ではありません。教育開発支援センターでは、これまで長年続けてきた紙ベースのアンケートから本学で導入している LMS (Learning Management System) である manaba (通称、マナビー) による授業アンケートに切り替えました。併せて、「授業振り返りシート」を導入し (こちらは未だ紙ベース)、両者を一体化させながら授業の改善、特にアクティブ・ラーニングを推進する方針を立てました (図 1)。

この変革の目的は以下、4 点にありました。

- 1) アンケート実施の簡便化 (教員): 印刷された重たい授業アンケート用紙を教室に持参する必要がなくなった。
- 2) アンケート実施の簡便化 (学生): ほぼ全員所持していると考えられるスマートフォンで実施することができる。デジタル・ネイティブ (Digital Native) と言われる現代の若者にとっては紙に書き込むよりも、スマートフォンの画面に打ち込む事の方が遙に快適であると考えられる (但し、この点については検証が必要である)。
- 3) アンケート実施の柔軟性 (学生): アンケートは教室内だけで実施する必要はなく、欠席した学生もまた実施期間であればアンケートに参加することができる。
- 4) フィードバックの迅速化 (教員): 教員はセンターからの集計報告を待つことなく、manaba 上でグラフ表示によって、受講生の傾向を知ることが出来る。
- 5) 自由記述の復活: とすると紙ベースでの授業アンケートの自由記述欄は工夫はされていたものの (電子読み取り)、学生の声をじっくりと聞くことにおいては制限があった。今回、自由記述欄が以前の紙ベースの授業アンケートのように設定されているため、学生が授業に関する考え (感想、改善点などの教員へのアドバイス) を自由に書き込む事が可能となった。

一方で、何事にも「諸刃の剣」現象はあるもので、予定していた良いことばかりではありませんでした。便利になったからといって世の中が良くなるとは限らないことと似ています。学生のスマートフォンはギリギリまでギガ数を節約しているものが多く、全教室に Wi-fi が整備されていない状況下では、どの授業でもスムーズに授業アンケート

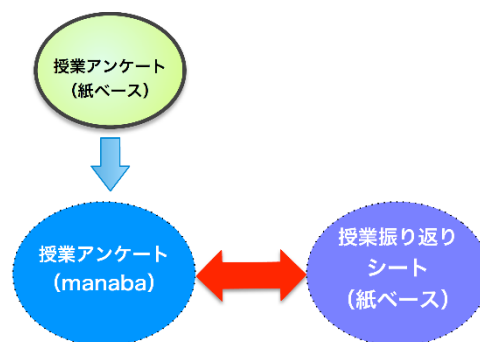


図 1. LMS による授業アンケート

を実施することは出来ていないようです。また、図 2 をご覧下さい。

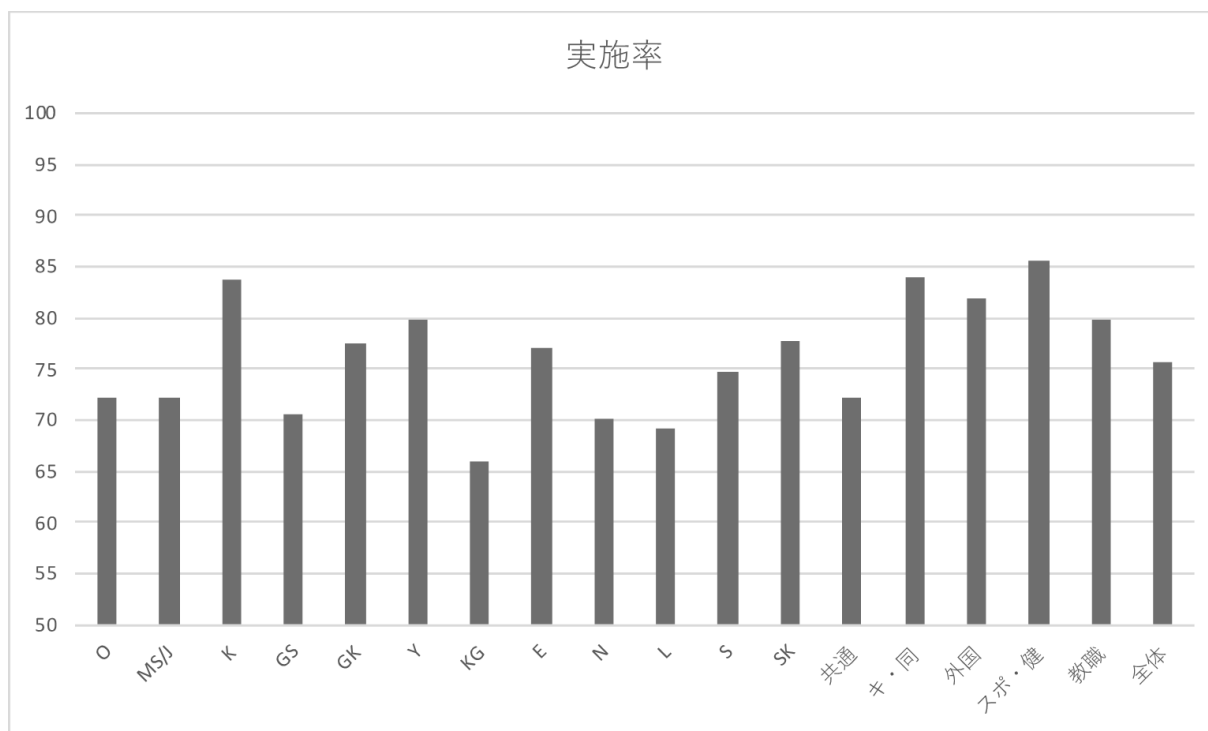


図 2. 2019 年度春学期授業アンケート結果（グラフ中の各学科・科目区分は p. 19 表示）

利便性を図った結果、肝心の授業アンケート実施率が平均で「約 20% 近く」下がってしまっています（2018 年度秋学期の実施率は 96%）。学科による多少の相違はありますが、90%を超えた学科・科目区分は存在しません。これは今回の「2019 年度春学期 授業に関するアンケート」の最も肝心な部分だと思います。理由は割と簡単です。便利になったことによって、単に教員が授業アンケート実施を失念してしまったことがその最大の原因と考えられます。各学科の教務主任や教育開発支援センター運営委員の先生方の声かけがなければこの実施率は更に下がってしまっていた可能性すらあります。紙ベースの授業アンケートであれば、実施していなければ現物が目の前に残ってしまうので、アンケート自体が自然なリマインダーになります。ところが、デジタルの場合には目に見えるものは何もありませんので、極端な事を言うならアンケートを実施していても、実施したことを忘れて（私自身です）再度実施しようとして学生から止められるという現象すら発生します。これは初年度であることももちろんありますが、私達教員のコンピューター・リテラシー（Computer Literacy）がそれほど高くないことが影響しているのかもしれません。ただ、教員のそのような能力を今後高めてゆくだけでなく、アナログ的な対策（backstop）を考える必要があると思います。先にあげた、その他の利点（2-5）については今後の検証を待ちたいと思います。

さて、本年度の結果について、これまで蓄積してきた授業アンケートとも比較しながら

ら、以下、概観してみたいと思います。

(1)「授業実施に関する質問」の結果について

今回の授業に関するアンケート総評は、次の i から iv の 4 点を念頭に作成しています。

- i. 同志社女子大学ホームページにも掲載されている「2019 年度 春学期授業に関するアンケート実施結果報告書（授業期間内実施科目）：全学および各学科等別集計結果、学科等間比較資料」
(https://www.dwc.doshisha.ac.jp/faculty_and_staff/support_center/quest/questionnaire_report) を参照（元データ）。
- ii. 各学科科目、共通学芸科目、キリスト教・同志社関係科目、外国語科目、スポーツ・健康科目、教職に関する科目について、A) 全体の傾向、及び B) 前年度からの変化動向を検討。
- iii. 質問項目ごとの分析評価について：アンケートの質問は従来の 4 件法から 5 件法へ（1. そう思う [Agree]; 2. ややそう思う [Somewhat Agree]; 3. あまりそう思わない [Somewhat Disagree]; 4. そう思わない [Disagree]; 5. わからない [Don't Know]）。グラフ化するに当たっては、1-5 を逆転して点数化している。本来は、5 は「分からない」という回答であるので別基準とすべきであるが、今回の分析では単純に 1-5 を含め平均値を求めている。グラフ化にあたっては過去との比較を分かりやすくするために、1-5 を逆転している。

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	わからない
5	4	3	2	1

4 以上は強い肯定、4～3 は弱い肯定、3～2 は弱い否定、2 以下は強い否定を示す。

- iv. manaba による授業アンケートへの移行に伴い、従来、各学科主任、教務部長によって作成された報告書が本年度より廃止された。従来のような、各学科主任・教務部長による報告書には基づいていない。

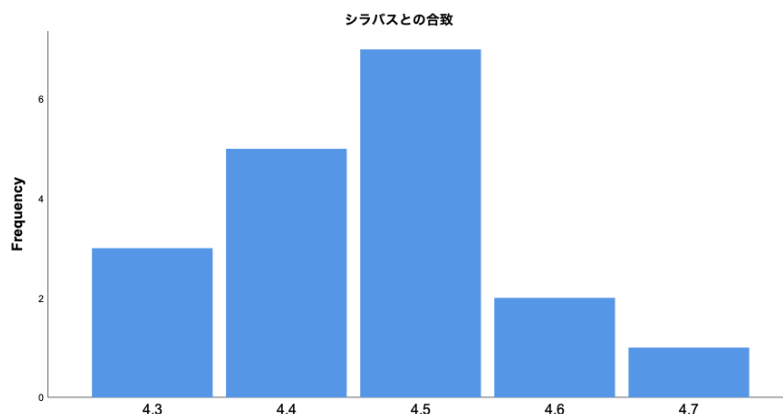
この総評は、manaba で分析された「授業アンケート実施結果報告書」をもとに総括することを意図しています。本格的な「分析」は今後、一次データに基づき統計的手法によって行うべきであることは言うまでもありません。ビッグ・データが形成されてきています（授業アンケートデータだけで少なくとも 10 年以上の蓄積があります）。このような大学における IR (Institutional Research) に本学もそろそろ足を踏み入れる時期にあると思われます。

Q1. シラバスとの合致

全体結果：

「Q1: 授業内容はシラバスに合っていましたか」

図3の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.3を上回っていました。



質問紙の尺度の違いはありますが、同じ区分の平均値が 3.60 (2017 年度春学期) → 3.63 (2018 年度春学期) → 3.64 (2018 年度秋学期) と全体として上昇傾向にあります。この結果から、全体的な傾向としてほとんどの授業でシラバスに沿った授業が展開されていたと評価できます。シラバスには特に評価方法についての記述もあります。シラバス通りに授業が行われることは学生にとっても教員にとっても「当然」と受け止められている傾向が進んでいると思われます。この点は同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後はより一層わかりやすく実現可能なシラバスの構成方法を議論する時期に達していると考えていいのではないかと思います。

学科・科目別：

どの学科も良好な状況ですが、特に、回答者数が「5,735 名」と最多の学生を抱える社会システム学科において「4.5」という中央値以上の評点である点は注目されます。多くの学生が受講する学科でのシラバスと授業の合致は学科運営上重要であり、授業を円滑に進める基盤となると思います。

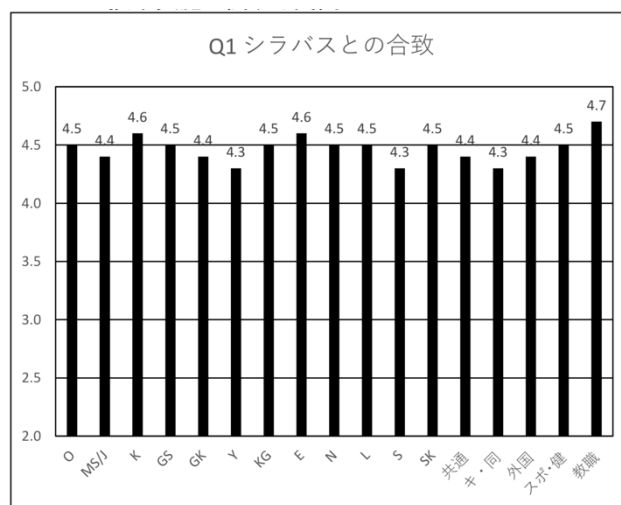


図 3. 学科・科目区分の分布 (Q1)

Q2. 受講生の理解度

全体結果

「Q2: 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか」

図4の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.0を上回っていました。

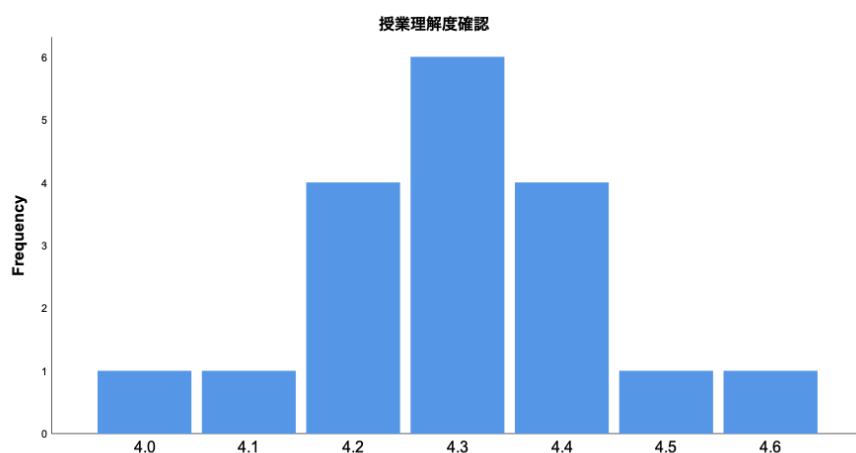
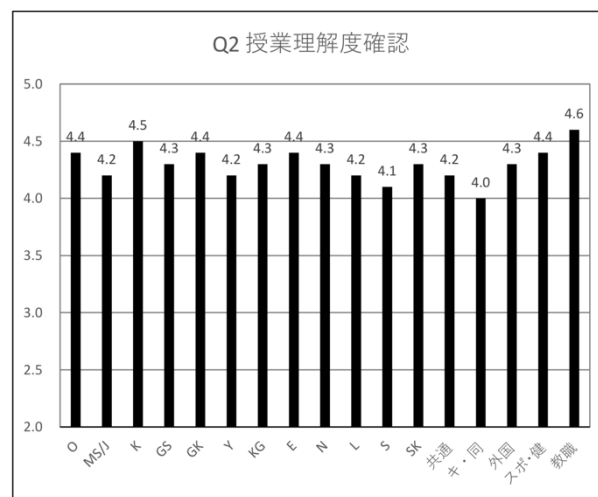


図 4. 学科・科目区分の分布 (Q2)

同じく質問紙の尺度の違いはありますが、同区分の平均値が 3.31 (2017 年度春学期) → 3.38 (2018 年度春学期) → 3.42 (2018 年度秋学期) と全体として上昇傾向にあります。ただし、Q1 と比較すると学科間によるばらつきは多少あるようです。「受講生の理解度を確かめながら授業を進める」ことはアクティブ・ラーニングの中核をなす部分であり、「学生に寄り添いながらきめ細やかな指導をする」ことは女子大学のリゾンドートルのひとつでもあります。今後はより一層理解度が確認できるような授業の在り方を、交流・共有しながら更に学生の理解度を確かめながら授業を進める工夫をする時期に差し掛かっていると考えられます。

学科・科目区分コメント

この項目、学科の定員やクラスサイズの大小によって影響されているようです。この点については SA (Student Assistant) や TA (Teaching Assistant) の活用など教員や学科での一層の取り組みが必要であることは言うまでもないところですが、学生/教員比率を下げるなど大学としての教育環境の一層の充実が求められるところです。日本語日本文学科 (4.3) は学科の規模との対比においては高水準にあると考えられます。



Q3. 授業レベル

全体結果

「Q3: 授業レベルは自分に合っていましたか」

図5の度数分布分析が示す通り、他の項目と比較してこの項目がチャレンジングであることは明白です。

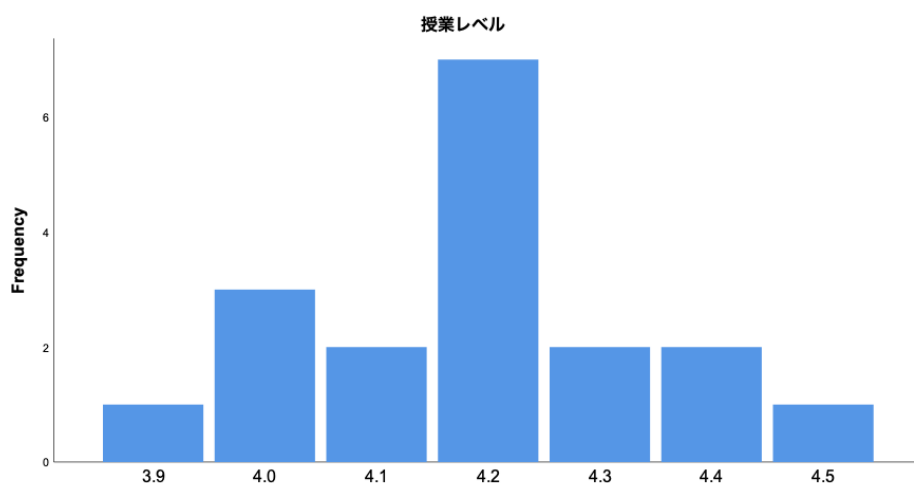
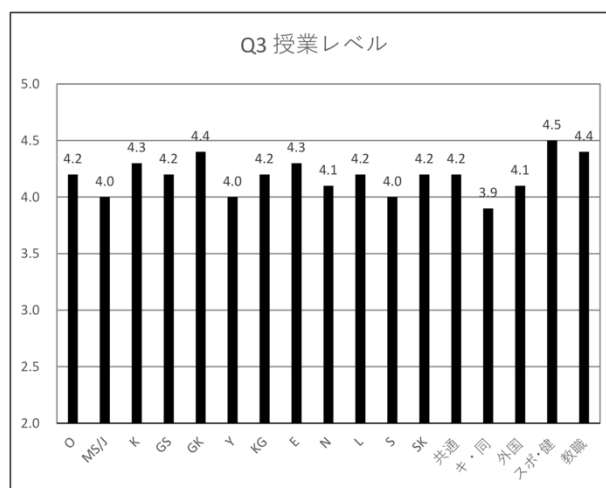


図 5. 学科・科目区分の分布 (Q3)

同じ区分の平均値が 3.25 (2017 年度春学期) → 3.38 (2018 年度春学期) → 3.35 (2018 年度秋学期) と全体としては高止まり傾向にあります。これは学生の理解度を丁寧に確認しながら授業をすすめる工夫をするなど、ひとえに一人ひとりの教員及び各学科・各科目区分で取り組まれた授業改善の成果にほかならないと評価できます。この問題は受講学生の学力レベルと授業目的との難しい関係に依存するところです。特に大人数クラスではレベル調整が困難となるのは必然的です。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

習熟度クラスなどクラス形態の工夫はひとつの方策であると考えられます。そのような中でも現代こども学科 (4.4) やスポーツ健康科目 (4.5) の高水準は注目されます。改善の方向についてはアクティブ・ラーニング研究会などを通し教員間で一層の情報交換が必要であると思われます。



Q4. 授業の双方向性

全体結果

「Q4: 教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は 受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか」

図 6 の度数分布分析が示す通り、この項目も課題を抱えていることが分かります。

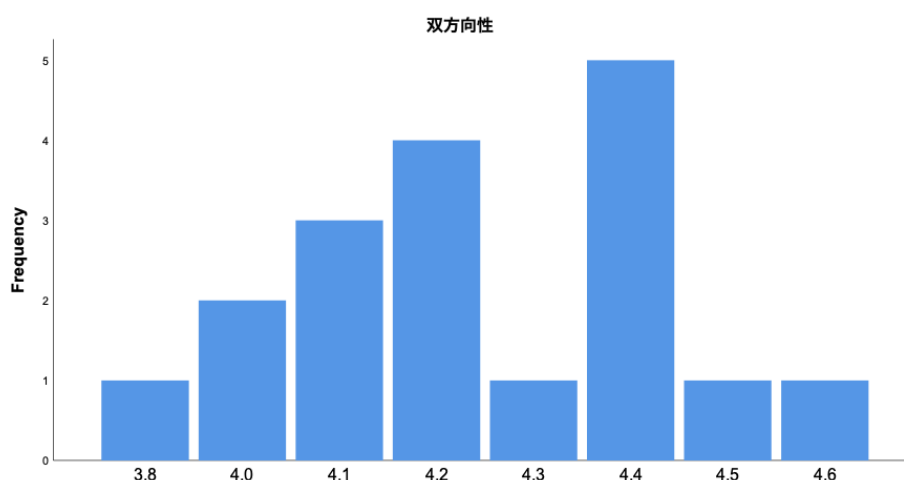
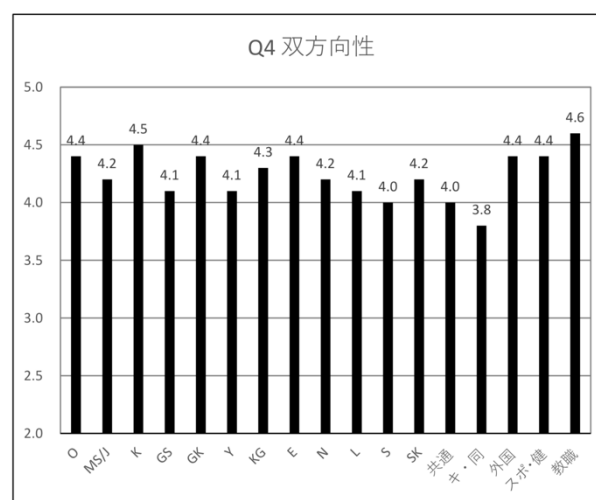


図 6. 学科・科目区分の分布 (Q4)

同じ区分の平均値が 3.24 (2017 年度春学期) → 3.31 (2018 年度春学期) → 3.35 (2018 年度秋学期) と全体としては高水準にあり、全体的な傾向として改善が進んでいると評価できます。双方向性のある授業はアクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。ICT も更に利用しながら一層の向上が望まれるところです。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。特に学科間の相違が大きな項目 (3.8~4.6) となっている点も注視する必要があります。

学科・科目区分コメント

特に、国際教養学科 (4.5) や英語英文学科 (4.4) の高水準が注目されます。スキル演習科目に留まらず、学生間のグループワーク、プレゼンテーションや振り返りなど、アクティブな授業運営がこの双方向性の核になると考えられます。多彩なアクティビティを準備しながら、学生が授業内で声を発することができる授業デザインが一層必要になると思います。



Q5. フィードバック

全体結果

「Q5: 提出物に対するフィードバック(採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか」

図 7 の度数分布分析が示す通り、この項目も学科・科目区分で相違が大きな項目です。

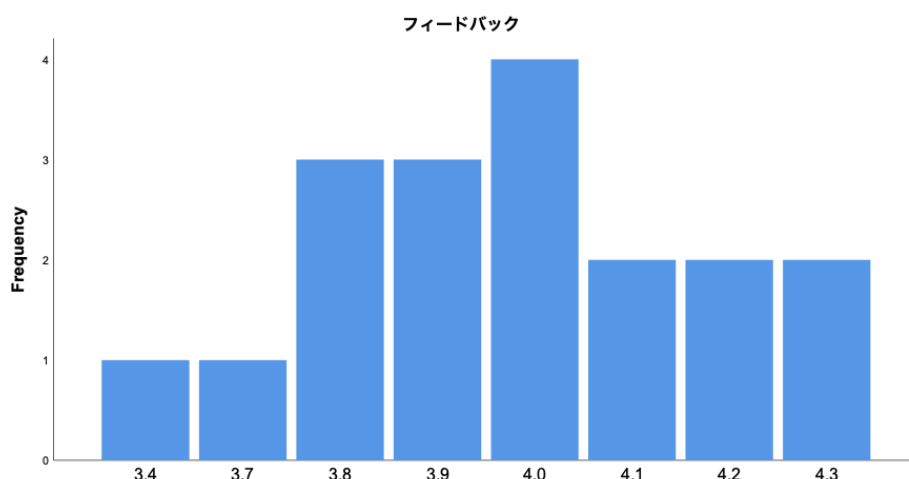
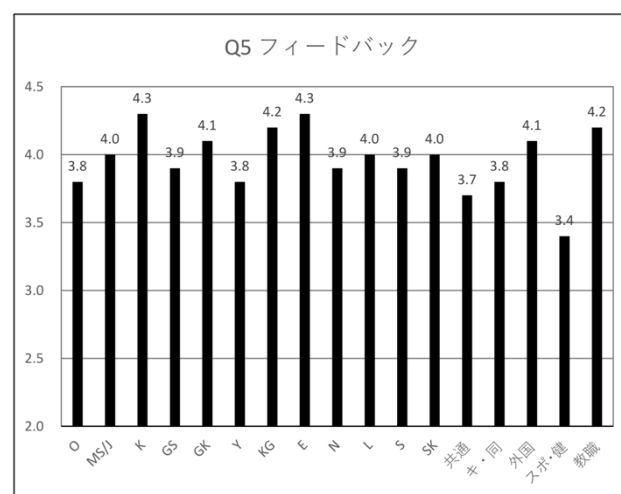


図 7. 学科・科目区分の分布 (Q5)

同じ区分の平均値が 3.13 (2017 年度春学期) → 3.23 (2018 年度春学期) → 3.28 (2018 年度秋学期) と全体としては順調に改善が進んでいると評価できますが、十分とは言えません。フィードバックは、アクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。特に、マナビー(LMS)を活用することにより、「課題の提出⇔フィードバック」が効率的にできると思われます。同志社女子大学としてはこの点については最重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

特に、看護学科 (4.2) の高水準が注目されます。重要なことは「出されたレポートは返す」というシンプルな原理だと思われます。添削などにおいても、学生が書いたもの全てについてフィードバックする必要は必ずしもないのかもしれないかもしれません。むしろ、学生が次へのステップとなるようなポイントを押さえた「選択的な」指摘が効果的であると思われます。教員もエネルギー配分を考え、時間を効率よく使うことが出来ます。



Q6. 理解を促進する工夫

全体結果

「Q6: 言葉による説明だけではなく受講生の理解を促進する工夫がなされていたか」

図8の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.0を上回っていました。

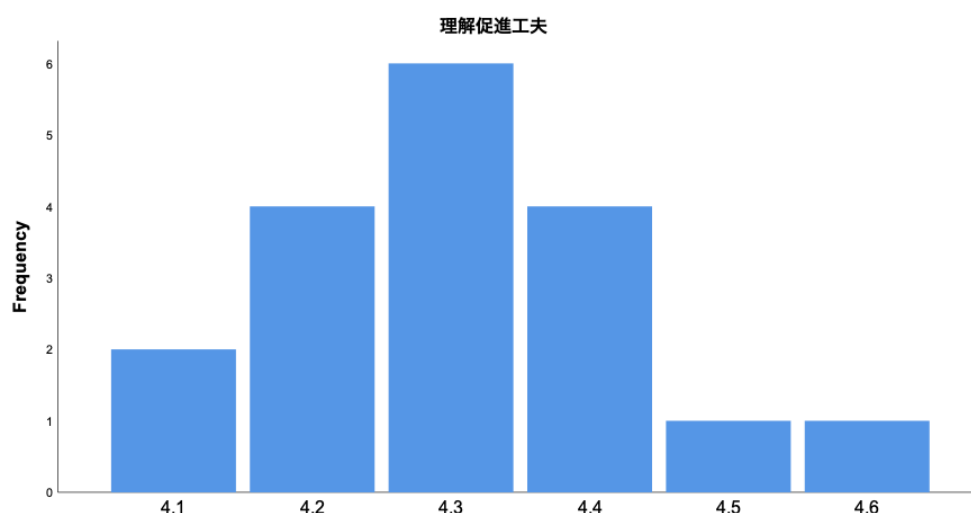
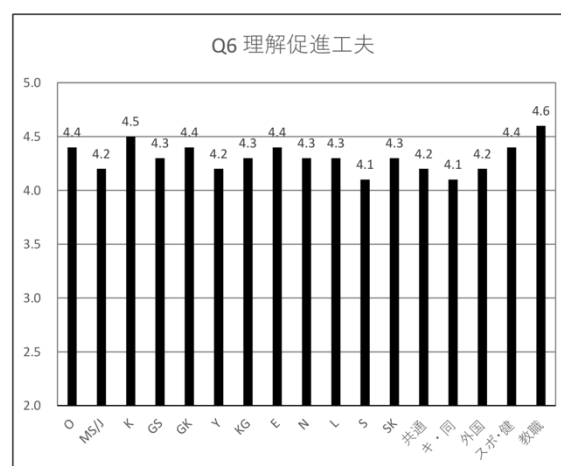


図 8. 学科・科目区分の分布 (Q6)

同じ区分の平均値が 3.32 (2017 年度春学期) → 3.38 (2018 年度春学期) → 3.41 (今回) と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。これはどちらかというと「当たり前」の質問です。数値が示す通り、どの学科・区分でも、4.0 以上の平均が得られ、多様な工夫がなされている姿が目につかびます。この点については同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後は質的な議論（どのような工夫）に移行する時期に来ているのではないかと思います。すなわち、具体的にどのような工夫がなされているのか、その工夫を集約して大学として共有してゆく方向性です。

学科・科目区分コメント

作業、制作、資料の提示や配布、映像等による説明、ロールプレイングなど多様な工夫が可能であると思われます。このような創造的な工夫はアクティブ・ラーニング研究会などを通して全学で共有したいものです。特に、音楽学科 (4.4) や人間生活学科 (4.3) の高水準が注目されます。



Q7. 自主学習

全体結果

「Q7: 自主学習を促す工夫がなされていましたか」

図9の度数分布分析が示す通り、同志社女子大学として次のQ9と併せて、自主学習・学習時間は喫緊の課題となっています。

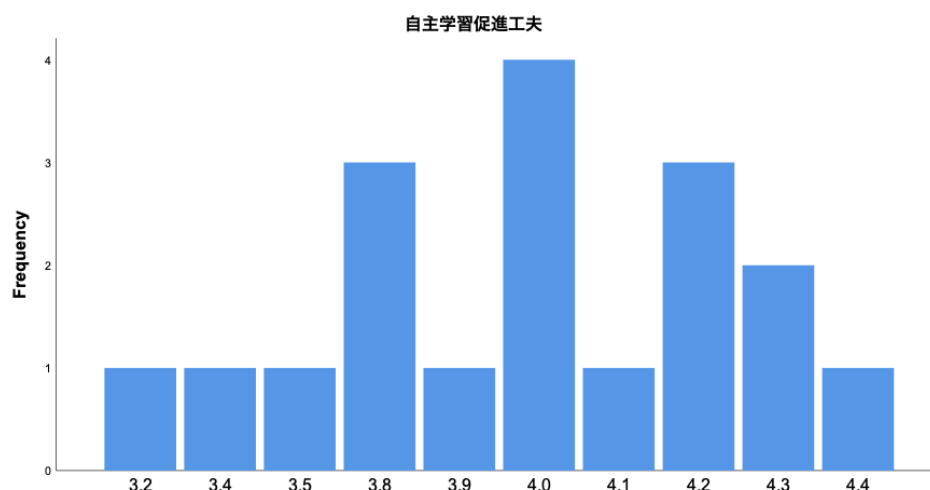
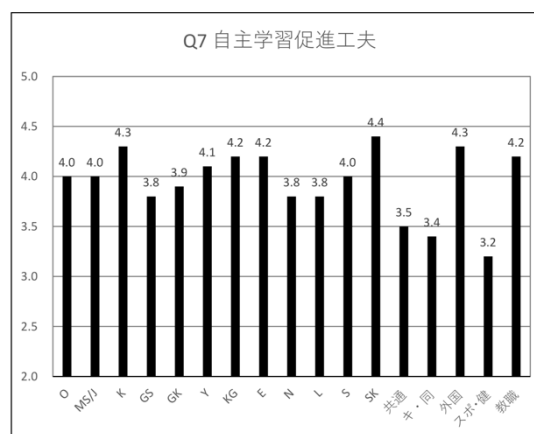


図9. 学科・科目区分の分布 (Q7)

同じ区分の平均値が 3.08 (2017 年度春学期) → 3.16 (2018 年度春学期) → 3.20 (2018 年度秋学期) と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。しかし設定されている項目の中で低い水準にあるのがこの質問です。もちろん、科目群によってはそれほど授業外学習が求められないかもしれません (スポーツ・健康科目群、3.2)。逆に外国語科目群の平均値が比較的高くなっているように (4.3)、復習や予習が必要となるものもあります。同志社女子大学としては自主学習については最重点項目として「継続的に取り組む」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

自主学習時間を増加するために、各学科では苦渋に満ちた取り組みがなされていると思われます。そのような中でも管理栄養士専攻 (4.4) の高水準が注目されます。いかに主体的な学習姿勢を習得・維持させるかについて継続的な議論が必要であると思われます。



Q9. 自主学習

全体結果

「Q9: この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。」

図10の度数分布分析が示す通り、興味深い結果です。

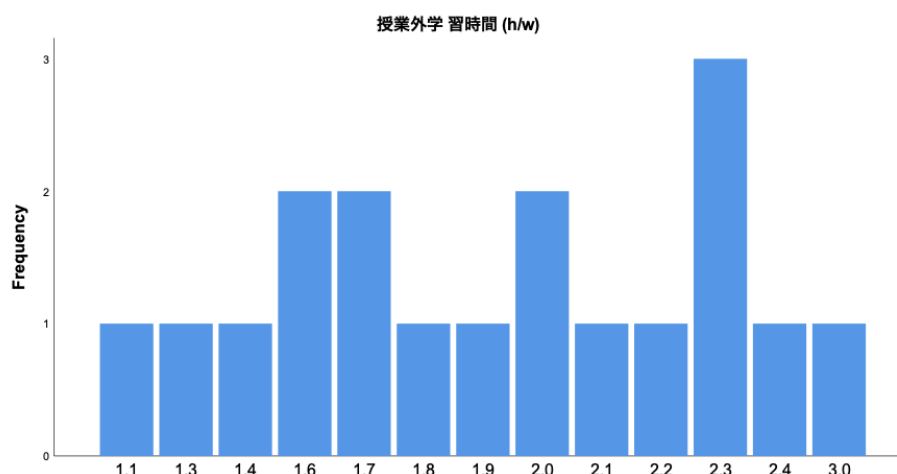
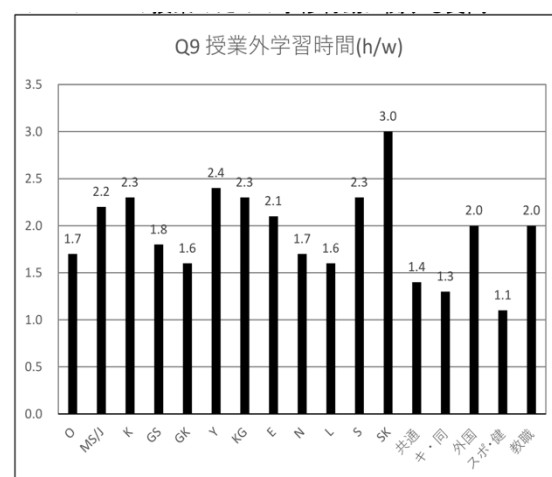


図 10. 学科・科目区分の分布 (Q9)

実際の学習時間に関しては各学科間で大きな相違が見られました。しかし、2018年度秋学期の1週間あたりの総学習時間が平均で「0.82時間」であることからすると、今回は平均が「1.9時間」ですのでほぼ倍増したことになります。にわかには信じがたい結果ですが、もしこれが本当だとすると、喜ばしいことです。設問が1週あたりの学習時間であることから、例えば、半期の上限の24単位（仮に1科目が2単位と設定）の授業科目を受講しているとなると、1週間あたりの総学習時間は、 $1.9 \times 24 \div 2 = 22.8$ 時間、1日に換算すると（土日を除いて）、 $22.8 \div 5 = 4.56$ 時間となります。前回は1.97時間でしたので2倍以上に伸びたことになります。この信憑性については今後の検証を待ちたいところです。

学科・科目区分コメント

特に、医療薬学科（2.4）、食物科学専攻（2.3）、メディア創造学科/情報メディア学科（2.2）で比較的長時間授業外学習に取り組んでいることが注目されます。国家試験であったり、実験やプロジェクトなどに取り組んでいることがその一因であると考えられますが、他の学科にもヒントになる秘訣が隠されているかもしれません。



Q10. 積極性

全体結果

「Q10: あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか」

図 11 の度数分布分析が示す通り、学科・科目区分で相違が大きな項目です。

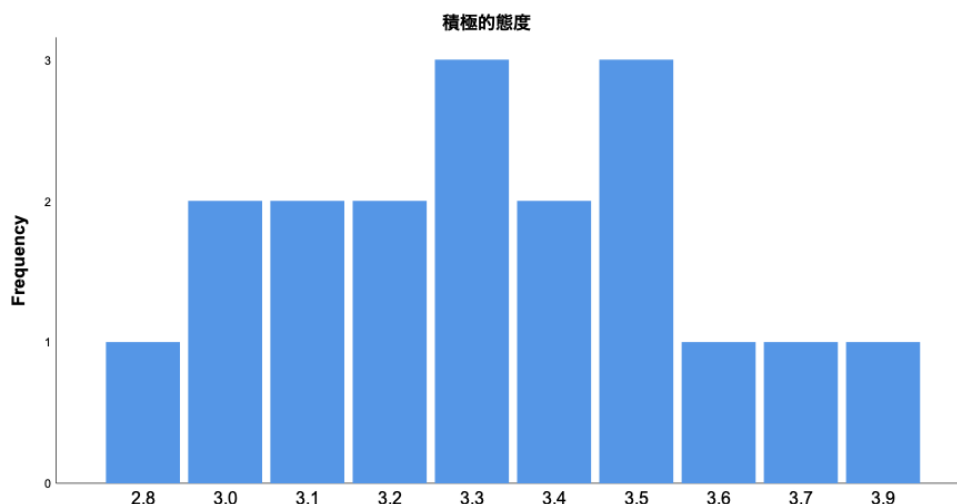
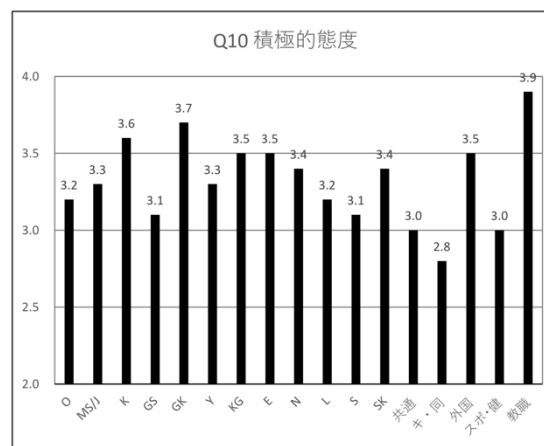


図 11. 学科・科目区分の分布 (Q10)

同じ区分の平均値が 2.39 (2017 年度春学期) → 2.51 (2018 年度春学期) → 2.61 (2018 年度秋学期) と全体としては改善が進んでいると評価できます。しかし低い水準にあるのは間違いのないところです。ここからは、教師中心の・教える内容中心の授業が多いことが想像されます。アクティブ・ラーニングに象徴されるように 21 世紀の教育は「教師中心→学習者中心へ」そして「何を教えたか→何が理解できるようになったか・何ができるようになったのかへ」のパラダイムシフトがポイントです。しかし同志社女子大学ではまだパラダイムシフトは不発のようです。これは大学というよりはむしろ学生の意識がそのように変わっていないことにも問題はあると思います。同志社女子大学としてはこの点について、「最重点項目」として継続的に取り組んでゆく必要があると思います。

学科・科目区分コメント

特に、教職に関する科目 (3.9) が高水準であることが注目されます。



Q11. 授業や関連分野への意欲

全体結果

「Q11: あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか」

図 12 の度数分布分析が示す通りですが、今後、どの分野においても就職後も継続的に新しい知識や技術が要求されると考えられます。このことから、在学中から関連分野の学習をさらに進めたいと思えるような授業の工夫が必要と考えられます。

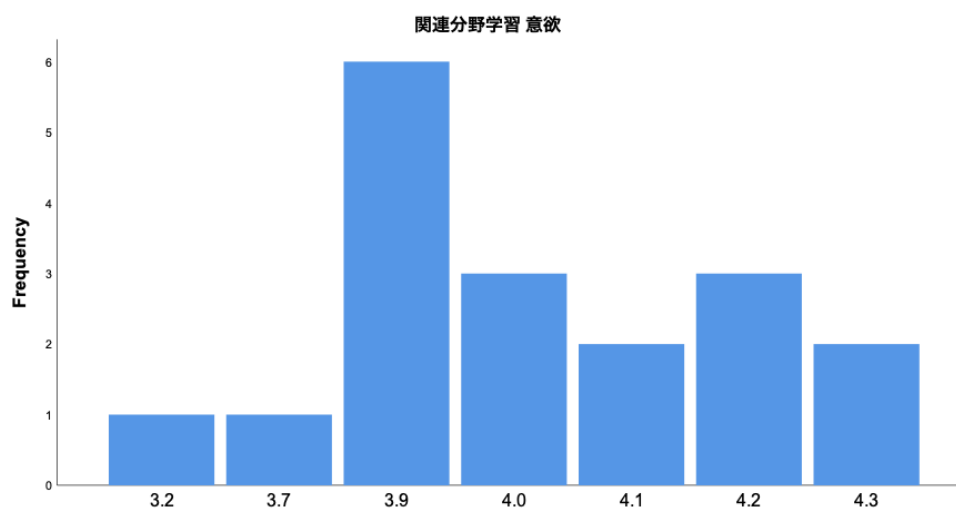
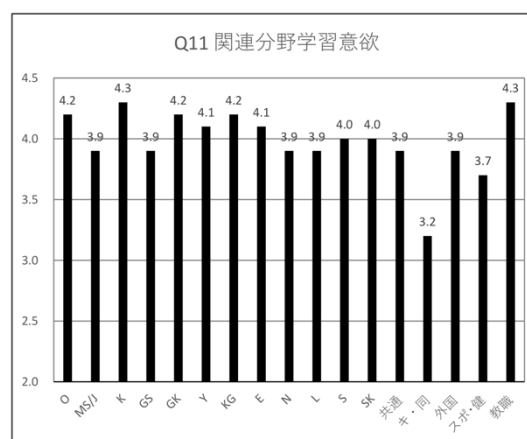


図 12. 学科・科目区分の分布 (Q11)

同じ区分の平均値が 3.06 (2017 年度春学期) → 3.14 (2018 年度春学期) → 3.16 (2018 年度秋学期) と全体としては順調に推移していると評価できます。一方で、キリスト教・同志社関係科目に関しては、全学科共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。むしろ各学科の授業においても積極的に建学の精神やキリスト教主義への関連性を示唆することが必要なのかもしれません。また専門性を一層深めるとともに関連分野についての興味関心を深めるため、どの授業においても配布されている参考文献一覧にひと工夫凝らすことも考えられると思います。例えば、一覧表を提示するだけでなく、実際の参考文献を時々授業で紹介することも効果的かもしれません。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。



Q13. 到達目標達成への指導

全体結果

「Q13: 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか」

図 13 の度数分布分析が示す通り、学科・科目区分で相違が大きな項目です。

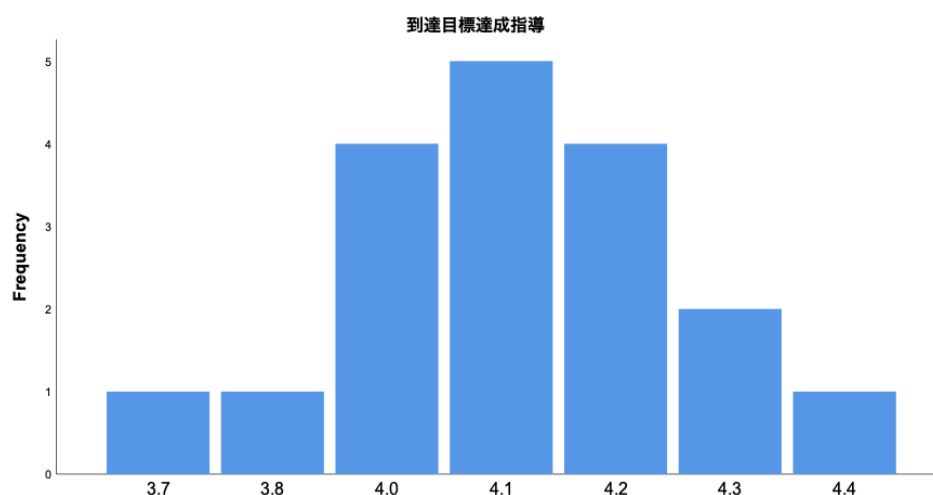
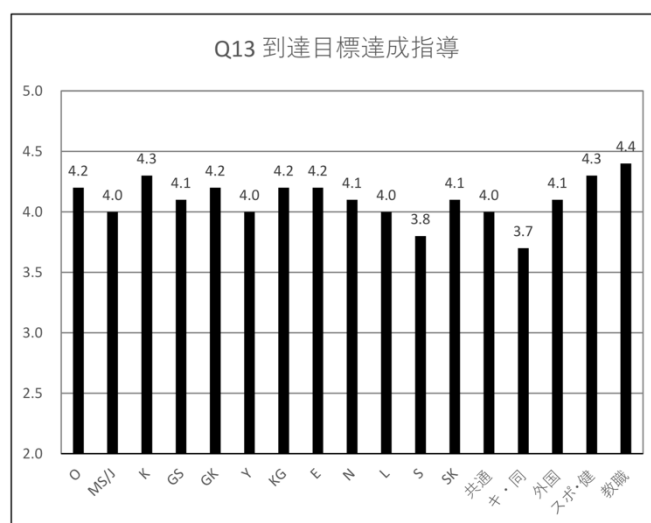


図 13. 学科・科目区分の分布 (Q13)

同じ区分の平均値が 3.26 (2017 年度春学期) → 3.33 (2018 年度春学期) → 3.37 (2018 年度秋学期)、など好転傾向にあります。これらはいわば授業実施に関する Q1～7 の工夫や取り組みの成果が現れているものと考えられます。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

一人ひとりの学生と時間をかけて向き合う姿勢が必要となる項目だと考えられます。そのような中でも、多様な言語を扱う外国語科目 (4.1) が高水準にあることが注目されます。



Q14. 到達目標達成

全体結果

「Q14: あなたは到達目標を達成できたと思いますか」

図 14 の度数分布分析が示す通りですが、不思議なことに Q13 同様、正規分布のような分散になっています（学科・科目区分で相違が大きい）。

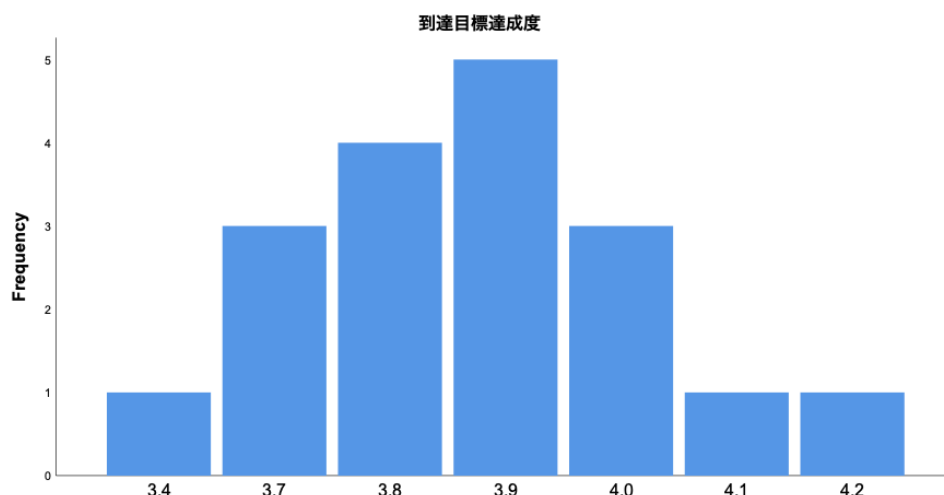


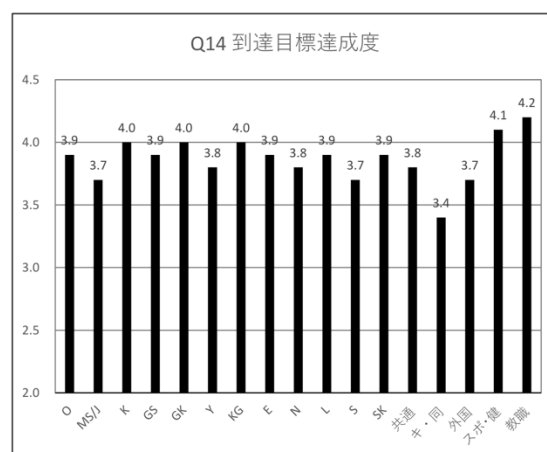
図 14. 学科・科目区分の分布 (Q14)

同じ区分の平均値が 3.06（2017 年度春学期）→ 3.15（2018 年度春学期）→ 3.21（2018 年度秋学期）、と全体としては順調に推移していると評価できます。

学科・科目区分コメント

学科・科目区分で比較してみると、教職に関する科目（4.2）、スポーツ・健康科目（4.1）、国際教養学科（4.0）、看護学科（4.0）など、到達目標を比較的设置しやすい学科とキリスト教・同志社関連科目（3.4）のように設定に工夫が必要な科目区分もあるようです。

また日本人特有の自己評価の低さという問題、学生自身が控えめで達成度を過小に評価する傾向があるのかもしれませんが、例えば、科目の達成目標—1つ1つの授業の達成目標の明確化、科目にもよりますが小テストなどの形成的評価の機会を多く持つなど、達成度が明確に分かるような仕組みも一層必要であるように思います。



Q15. DWCLA10

全体結果

「Q15: DWCLA10 の内、この授業の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを すべて選んでください」

この点については経年変化は算出しづらい部分がありますので、2019 年度春学期の特徴を、図 15 を参照しながら見ておきたいと思います。

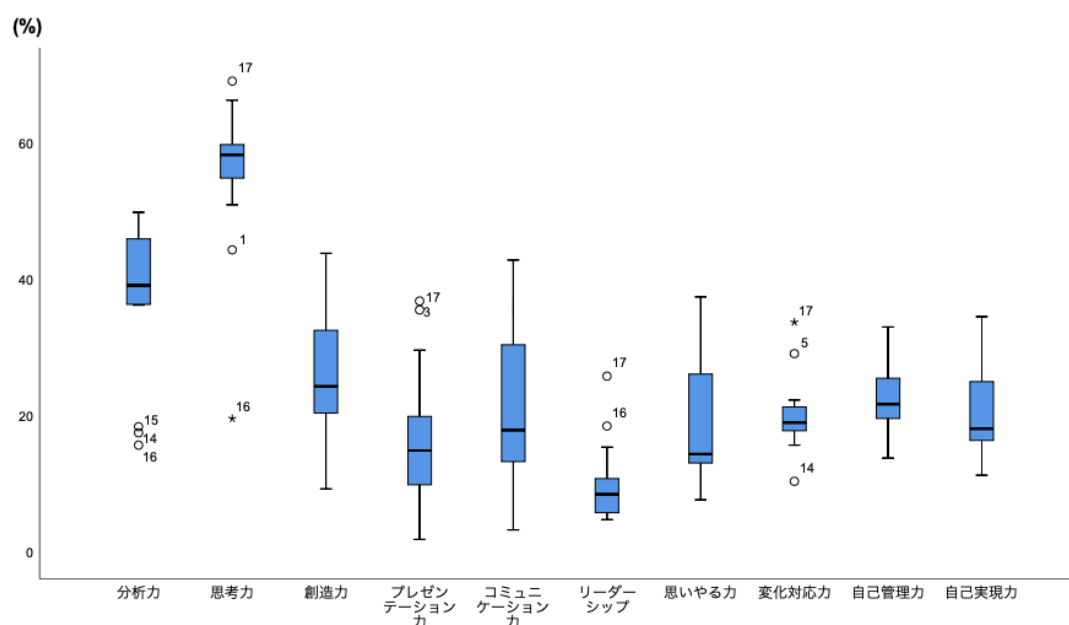


図 15. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10)

DWCLA10 の中で最も選択率の高かった項目は、1 位) 思考力 ([2018 年度秋学期、以下同様]49.6%→56.1%)、2 位) 分析力 (31.4%→37.3%)、3 位) コミュニケーション力 (16.5%→20.3%)、逆に低かった項目は、10 位) リーダーシップ (3.4%→8.6%)、9 位) プレゼンテーション力 (前年度データ欠損→15.1%)、3 位) 思いやる力 (8.1%→16.0%) でした。それぞれ上位も下位も%が 2018 年度秋学期と比較して上昇しているのが特徴です。

また、大学としては思考分析力が上位を占めているというのは妥当であるように思います。DWCLA10 が出来てかなりの年月が経ちますが、一方でこの項目の再検討もする時期にきているのかもしれませんが、例えば、創造力に含まれるのかもしれませんが、アントレプレナーシップ (起業家精神) に関連して「問題発見能力」は大学において育成すべき重要な項目であろうと考えられます。問題を教員が設定しているだけでは、リーダーシップも自己管理能力も自己実現力も身につけません。

まとめ

44,292名（延べ回答者数；2018年度秋学期は45,203名）という膨大な数字が示す通り、いまや巨大プロジェクトとなった観すらする授業アンケート。ここまで読み進めて頂きありがとうございました。

結果分析を見られてどのような感想を持たれたでしょうか？ここからは全体として同志社女子大学がよい方向に向かっている姿が浮き彫りになってきていると思います。

その中で、大学としてほぼ達成できた項目と今後力を注ぐべき点が明確になってきていると思います。

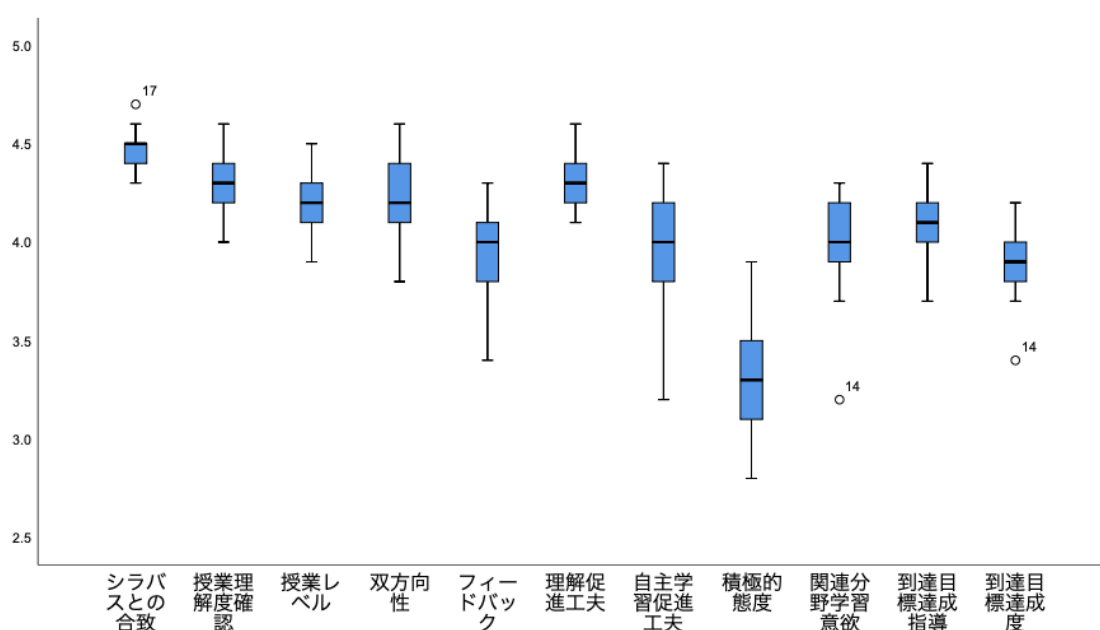


図 16. 授業アンケートの箱ひげ図

図 16 が示す通り、同志社女子大学として「今後重点的に取り組むべき項目」「引き続き改善に努めてゆく項目」「ほぼ達成出来た項目」が明確になっているように思います。

1. 今後重点的に取り組むべき項目
 - 積極的に意見を述べる態度 (Q10)
 - 効果的なフィードバック (Q5)
 - 自主学習の促進 (Q7, 9)
2. 引き続き改善に努めてゆく項目
 - 授業の双方向性 (Q4)

- 到達目標達成への指導 (Q13)
- 到達目標達成 (Q14)
- 授業レベルとの合致 (Q3)
- 授業の工夫 (Q8)
- 授業や関連分野への意欲 (Q11)
- 履修理由の自己選択化 (Q12)
- DWCLA10 (Q15)

3. ほぼ達成出来た項目

- シラバスと授業の合致 (Q1)
- 理解を促進する工夫 (Q6)
- 受講生の理解度を確認しながらの授業展開 (Q2)

一方で総評を通していくつかの問題点も明らかになってきています。

- A) 実施率の向上。まずは紙ベースの授業アンケートの実施率まで回復する必要があります。この方法については先にも述べたように教員のコンピューター・リテラシー向上だけでなく、アナログ的なものも組み合わせた対策を考える必要有り。
- B) データの蓄積を生かし切れているとは言えません。この点については過去 10 年間程度のデータを分析し、授業改善の方向性を探る必要があります。またその分析の際には探索的因子分析 (EFA) や相関関係など統計分析の手法も活用することが求められると思います。これまでの膨大なデータから授業改善の方向性も見えてくると期待されます。これについては大学に統計や IR の専門職を配置する必要有り。
- C) 質問項目の再検討が必要。DWCLA10 の項目など質問項目の修正や入れ替えなどをしてゆく必要有り。

今後は、以上のような問題点の改善にも努めながら、既に達成した項目は削除しながら、重点的に取り組むべき項目に注視する必要があります。

Wiggins and McTighe を引用し、西岡 (2008) は「教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計する」「逆向き設計」の重要性を主張しています。今、まさに私達も、種類は異なるものの、この授業アンケートという「教育結果」をもとに新しい「授業デザイン」「カリキュラムデザイン」の設計が求められているのではないのでしょうか。

一般的に、授業アンケートは授業をした後の「結果」に過ぎないと思われがちですが、「次のスタート」のための示唆を多く含んでいます。そのためにも、自分自身の授業アン

ケート結果（ミクロな視点）と同時に学科や大学、ひいては 21 世紀の教育の方向性（マクロな視点）を考え合わせる時期に来ているのだと思います。

教師は「社会と時代のパイオニア」（天野正輝、1983、Personal communication）でなければならないと思います。そのためには、私達も年々授業を変革することに迫られています。容易ではなさることですが、そこに教育のダイナミズムと醍醐味があるのも事実です。あらたなアイディアを試みることを恐れず、常にパイオニア精神を持ち続けながら、今後も、授業の PDCA サイクルを意識し、同志社女子大学の新しい授業を創り出してゆくことが求められていると思います。

参考文献：

西岡加名恵（2008）『逆向き設計で確かな学力を保证する』東京：明治図書

＜凡例＞

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目
MS/J	メディア創造学科/情報メディア学科科目
K	国際教養学科科目
G S	社会システム学科科目
G K	現代こども学科科目
Y	医療薬学科科目
K G	看護学科科目
E	英語英文学科科目
N	日本語日本文学科科目
L	人間生活学科科目
S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
S K	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
共通	共通学芸科目
キ・同	キリスト教・同志社関係科目
外国	外国語科目
スポ・健	スポーツ・健康科目
教職	教職科目